

デンソー山岳部 07年春山合宿報告書 2007.04.28-05.01 榎島 - 赤石岳



赤石岳本峰から見た大倉尾根

撮影 町田 SL

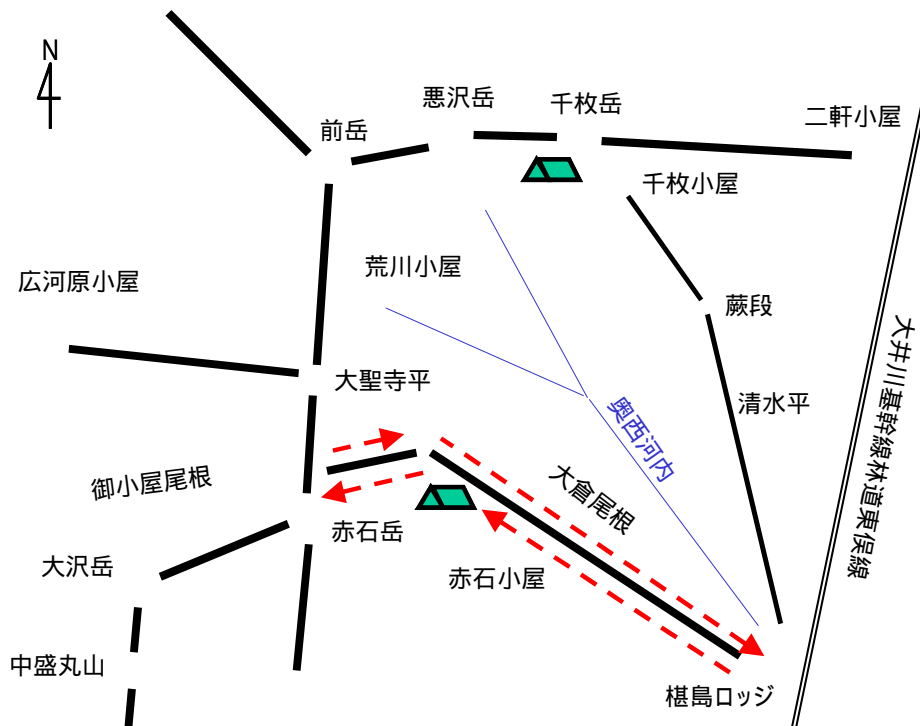
メンバー

金子 清(CL) 町田 修(SL) 渡辺勝利(渉外) 亀山 誠(地形) 竹内 幹雄(気象)
村越 好晴(装備) 松中 真理子(食糧、会計) 江頭 孝治(記録) 以上8名

目的と山域

雪上技術の維持向上と親睦
南アルプス ^{さむらじま} 榎島 ~ 大倉尾根 ~ 赤石岳

概念図



合宿概要

計画	昨年の春山合宿、爺ヶ岳東尾根～鹿島槍ヶ岳登山の経験を活かし、若手部員のステップアップを狙いに、赤石岳東尾根～赤石岳のルートを計画した。畑薙第一ダムから榎島までの林道は榎東海フォレストのリムジンバスを往復利用することにした。利用するにあたっては宿泊が条件のため、初日を移動日とし刈谷を朝出発し、登山口付近の榎島ロッジ(1泊2食付)を宿泊地とした。(昼間、車での移動と宿泊は我々にゆとりと十分な休養を与えてくれた。) 今回も大勢(8名)参加の合宿となった。 (金子)
ルート	今回のルートの核心部は富士見平から上部の「ラクダの背」と呼ばれる岩稜地帯である。夏道は左にトラバースしているが、冬のルートはナイフリッジ通しに進むため、細心の注意が必要である。3日目、核心部のアタックメンバーについては天候、雪の状態、部員の体調等を考慮し、現地判断することとした。(M氏は計画段階で富士見平のベースまで) (金子)
行動	初日の移動は交通渋滞もなく、茶畑の景色を楽しみながら一路、榎島ロッジまで行く。2日目は休養充分で榎島登山口から富士見平まで標高差約1500mを全員バテることなく、いっきに登った。富士見平から上部を偵察するが、予想以上に厳しい状況で、部員のレベル、体調等を考慮し、結果、ベテラン3名での赤石岳頂上アタックとなった。残った5名はW氏(元愛知岳連指導員)による雪上訓練で雪上技術向上に努めた。最終日は悪天が予想され早朝から下山開始した。 (金子)
装備	燃料はガス缶2個使用。テントは8人用と1人用。コッヘル1セットと一番大きいコッヘル1つで調度良かった。全体にあまり重くならず、軽量化に成功したのは良かった。 (村越)
食糧	今回は、ベースキャンプ待機という時間的余裕を見込んで、「山の上で作る楽しみ・食べる楽しみ」をテーマに計画しました。結果、全体的に量が多く、食事の時間も長めになり満腹状態になってしまいましたが、話題が広がり楽しく過ごせたように思います。 (松中)

行動ログ

4月28日(土) 晴れ一時にわか雨

アプローチ

行動：本社夜勤駐車場(7:45 発) 三方原SA(9:00) 千頭(11:20 昼食) 畑薙第一ダム(13:30 着)
『東海フォレストリムジンバス』(14:50 発) 榎島ロッジ(15:30 着)
入浴(16:00) 夕食(17:10) 懇親会(18:00) 就寝(20:40)

夜勤駐車場に集合のメンバー、車2台に分乗して南アルプス登山基地のひとつ、榎島をめざす。予報では流れ込む寒気のため不安定らしいが、朝の天気は上々。渋滞を避け、東名相良牧の原ICで降り、国道と県道で千頭まで北上する。ここまでは有名な大井川鉄道のSL旅もできよう。お昼は駅前で蕎麦とする。ご主人の心配りも見事な美味しい蕎麦。

さらに接阻峡温泉方面へ、井川湖ダムを經由して県道60号を進み、畑薙第一ダム。この辺り、芽吹き間もないうす緑が初々しい。これより東海フォレスト殿運営のリムジンバスのお世話になるのだが、まだ15:00の出発時間までは一刻ほどある。共同、個人装備のチェックなどに費やす。先着の女性2人、別の男性2人のパーティーの方々との情報交換させて頂いた。女性パーティーは千枚岳から、東岳(悪沢岳)、赤石岳を周るとのこと。皆さんザックが大きい。突然辺りが暗くなり冷風が吹き込んだと思うと、驟雨となった。バスが到着するまで雨宿り。

林道大井川線を小一時間揺られ、榎島へ。思いのほか立派なロッジ。溪流釣りの一行もおられる。ロッジは広々としておりお風呂、食事で贅沢する。畑薙までロングドライブの亀山さん、町田さん特にお疲れと察するが、この一泊でリフレッシュされたのではないかと。**(江頭)**



榎島に咲く

4月29日(日) 快晴

椹島から富士見平

起床(5:00) 朝食(6:00)

行動：椹島 1123m(6:45 発) 大倉尾根 1P 1350m(7:35) 同 2P 1740m(8:30) 同 3P 1940m(9:35) 同 4P 2150m アケノ(10:30) 同 5P 2300m(11:30) 赤石小屋 6P 2450m(13:00) 富士見平 2700m(14:10) 幕営(14:30) 夕食(16:00) 就寝(20:00)

まぶしいほどの快晴。睡眠も十分、小鳥の声もすがすがしい。ロジックで登山準備を済ます。隊列は町田 SL を先頭に松中、亀山、渡辺、村越、竹内、江頭、金子 C L。舗装道を少し戻り、鉄梯子が掛けられた大倉尾根取り付け点から入山する。

植林の檜^{ひのき}林をジグザグに折り返して行く。結構な急登に汗ばみはじめるころ、自然林の明るい尾根となる。空気が美味しい。2度目の休憩で町田 SL、立派な鹿角を発見。近くにテポしておくことに。登山道はさしたるギヤップもなく登りやすい。快調に高度を稼ぐ。約 1700m で昨日降った新雪、2027m の樺段^{かんばん}あたりから残雪が現れはじめた。2150m 程だろう、残雪が固く凍り付いている。ここで早めにアケノを巻く。尾根を小さく乗越したところで後を振り向くと東に富士山の頭が見て取れた。傾斜は緩やかになり小さなアップダウンを通過して赤石小屋まで。

千枚岳、東岳、赤石岳が雄大な山容を見せる。続く尾根上に小ぶりの岩峰がみてとれた。あそこが富士見平だろう。各自行動食を補給、既に 6 時間を経過し、あとは体内をめぐるアドレナリンの助けでさらに 1 時間強を頑張り、富士見平に立つことができた。東に堂々たる富士山。長かった荷揚げにやれやれた。

亀山、町田、金子先輩で明日の核心部を下見に行かれた。我々は幕営準備にとりかかる。全くの無風といってよく、首尾よくテントを張る。まだまだ周囲は明るいが早速ビール。松中さんが腕をふるう、夕食の肉味噌丼の完成を待ちながら山談義に花が咲く。秘蔵のお酒もありがたく頂戴するが、戴きすぎた。満天の星空で少し頭を冷やす。(江頭)



朝日の富士見平

4月30日(月) 快晴

赤石岳アタック

起床(4:00) 朝食(5:00) BC

行動：(富士見平) 発：05:50 1p:08:00 着 小赤石岳：09:40 着 赤石岳：10:30 着 小赤石岳下降；11:30 発 BC；16:20 着 夕食(17:30) 就寝(20:00)

昨日同様、雲一つない晴天である。本峰アタックは中年現役トリオ(金子・亀山・町田)の3人。このアタックメンバー決定にはいささか前段がある。前日、富士見平到着後に赤石岳の雄姿とそれに突上げる大倉尾根上部のダケツミクな雪稜を目前にして、少し物怖じした人。又は謙虚に自分の体力と相談して後進の雪上訓練にシフトした人。あるいは、あまりの絶景と好天を肴に酔い、体調を崩した人。そして計画段階から BC 定着が決っていた人、等々が自発的に登頂アタックの断念を告げたのである。しかし前日、ルート偵察で見た雪稜の状態と登攀の困難さを予測すると上記メンバーの申告は必然的でも



雪尻突破口から尾根上部



赤石岳山頂

小赤石の雪庇を抜けたときは9時半を回っていた。

小赤石岳から赤石本峰に続く稜線は素晴らしく広く大きい。ザイルを必要としない。今までの緊張から一気に開放された。ゆっくり休憩する。今まで見えなかった白山から中央アルプス御嶽・乗鞍が遠望される。そして富士山を遮るものは何一つない、その雄姿をいつまでも見ることができた。此处から30分程歩いて赤石山頂に着く。先行の2人組みが温かく我々を迎えてくれた。トレスのお礼を言いつつトリオの写真を撮ってもらう。トランパーでBCと交信を試みるが先客の会話は途切れることなく下山を開始する。下山ルートは2人組みと異なり、大倉尾根を忠実に下る。(彼らはカルに下りてツダの背最低氷に登り返すルート*デンソー山岳部としては考えられないルート選定) 緩んだ雪は足元が決まらず滑落=奈落の底である。小赤石の雪庇部からスカット&フィスの繰返しで慎重に下降する。富士見平は見えるものの時間の掛かる行動だ。ツダの背最低氷で一息つき、BCへ交信する「ラスト1P弱でBC到着予定」竹内さんの感度良好！に励まされ最後の1Pをコテで下る。BCには堅い握手で渡辺先輩とメバ-に迎えられた。メバ-はフルツェリにホットミルクとおきのビールで我々の登頂を祝福してくれた。長い一日だった。100%快晴の天気とメバ-に感謝したい。

話は前後するが昨年の爺ヶ岳東尾根の感想を引合いに私の今合宿の所見とする。何故なら若手メバ-がほぼ同じだからである。『安曇野の高瀬川沿いの道を北上しながら車中から見た爺ヶ岳・鹿島槍の雄姿は若いメンバーに幾分かの威圧感とチャレンジ意欲を斯き立てるのに十分な構図だった。その鹿島は体力と技術の甘さゆえに容易に我がパーティーを寄せ付けなかった。登頂への未練はさ程なかったがリベンジ鹿島への思いは確実に芽生えたと思う。その時はぜひ声をかけて欲しい。若手を中心にして大勢のメンバー構成で春山を楽しんだ合宿は最近なかった。活性化されつつあるこの状態を大切に育てて行きたい』その後一年を経て若手の成長を見た時、まだ暫くは声を掛けて貰えない。少し長い目で付きあいながらその日が来るのを待ちたい。(町田)



山頂から富士山

あった。

このような経緯で5人の雪訓練隊に見送られて意気揚々3人の出発となった。早速ツダの背でナイリッジのトランスからザイルを積極的に使ってスカットで確実に行く。さらに続く雪稜は森林限界の先に延び、否が応でも高度感が増す。細く切れた雪稜は少しの油断も出来ない。お互いを結びコンテナスとスカットで高度を上げる。ルート最大の難関は岩と雪の壁、おまけにザラメの雪は“ギシ”とアイゼンの出っ歯が決まらない。トップ亀さんが50mザイルいっぱいまでピッチを延ばし、ピッケルのシャフトを首まで打ち込んでピレ-する。町田と亀さんが交互にトップを代わり

雪上訓練

BC隊 7:30~14:30

アタック隊の3名を見送り、残った5名で富士見平にて雪上訓練を行う。渡辺さんを指導員に基本歩行のキックステップから始める。ホワイトアウトになり、現在地が分かっているとして、どの方向に進むべきかを、地図とコンパスを使い判断する。滑落停止。アイゼンを付けて、急斜面の歩行、滑

落停止。ロープを結んで、歩行訓練、滑落停止(ロープにピッケルを差し込んで停止)、確保訓練(トップ)、グリセード(雪が腐っていて滑らず上手くいかず、朝のうちにすれば良かった)。頭から滑落した時の止まり方を行う。トラバース、急斜面の苦手な竹内さんも、一日で随分スムーズに歩けるようになり、一定の成果を挙げることが出来た。ビーコンを使った訓練をするのを忘れてしまったが、一日快晴の中、常に富士山を拝んでの訓練は最高であった。

訓練が終わった頃、二人ずれのパーティが下山してきた。話をしながら、アタック隊の下山を見守る。暫くの後、疲れた様子の3名を、ゼリーとミルクで出迎える。お疲れ様。(村越)

5月1日(火) 曇りのち雨

富士見平から榎島、帰路

起床(2:00)、朝食(2:30)

行動:富士見平(4:00 発) 赤石小屋(4:35 着) 1P 休憩(5:00 着/5:10 発) 2P 休憩(6:00 着/6:10 発) 3P 休憩(7:15 着/7:30 発) 登山口(8:00 着) 榎島ロッジ(8:10 着/10:00 発) (バス) 畑難第一ダム(11:00 着) 口坂元温泉(12:50 着/14:35 発) 静岡 IC 牧ノ原 SA 部室(18:25 着/18:35 解散)

前日より、午前中に雨が降り出すことが予想されていたので、早めの出発を見込んで2:00起床。朝食にカレーうどんを食べた後、まだ暗闇の中、テントを撤収、アイゼンをつけ4:00に出発した。ヘッドランプの明かりを頼りに慎重に下山する。シラビソの林に入り下山方向を少し迷っていると、赤石小屋からこちらに向かってライトが照らされた。榎島ロッジより行動が同じであった、あの二人だった。8つのヘッドランプが林の中でさまよっているのが大変気になったに違いない。赤石小屋に到着、そのまま先へと急ぐ。5:00頃ようやく辺りが明るくなった。休憩後、さらに進むと雪道から凍結した道となるがアイゼンが効いて心強い。昨日、渡辺先輩より教わった雪上訓練を思い出しながら歩く。しばらくしてアイゼンを外した。落ち葉で覆われた急斜面を慎重に下る。1,600m付近を過ぎた頃、登りの際に町田さんが木の枝にひっかけておいた鹿の角を無事ゲット、先へと急ぐ。ウグイスなど様々な小鳥のさえずりが心地良い。8:00、無事下山。熱い握手、と同時に雨が降り出した。本降りになる前に下山でき、ひと安心。

榎島ロッジにて休憩後10:00発のバスに乗り込み畑難第一ダムへ。近くの赤石温泉に立ち寄ったが休みのため、さらに1時間半ほど(車酔いに耐えながら)谷合いの口坂元温泉を目指す。温泉で回復後、刈谷まで順調に車を走らせた。(松中)

参加者所感、他

春山合宿雑感

合宿の意義は長い山行期間を通して全員が頂上を極めるのみではなく、参加者個々が目的意識を持ち、その目的を達成するために自己研鑽を積むことだと考えているが、今回はその点で成果があった。

赤石岳大倉尾根の長大な雪稜と上部に岩稜部を持つルートを安全に登攀するには、雪山の基本的な技術のほかに岩登り技術、体力、気力・判断力、チームワーク等々の総合力が必要で、その一つでも欠ければ挑戦すべきではないが、今回は自分に何が不足しているかを判断し、本来はチームリーダーの決定すべき頂上アタック隊と雪上訓練隊の振り分けに自主的に加わったことが「自らが考える登山」の第一歩として意義は大きい。

頂上アタック隊は無事に登頂を果たしたことで自分達の持っている総合力の把握が出来、雪上訓練隊は雪上技術、確保技術等の訓練を通して各々が自分の技術の弱点と強化ポイントを見つけることができたと思う。

久しぶりに春山合宿に同行したOB部員としては、現役部員の山に取り組む真摯な姿勢を見て安心するとともに、紺碧の空と白銀の富士山、南アの大パノラマを満喫でき大満足の山行となった。今後も現役のベテラン、中堅、新人部員の更なる成長を見守っていきたい。(渡辺)



富士見平から富士山

07春山合宿をおえて

今春山合宿は、熟練者と若手の8名と大人数となり、全体に活気のあるスタートであった。

大井川も上流辺りになると、ヤマブキ・ミツバツツジ・コイワザクラの可憐な花たちや新緑に迎えられ、大倉尾根では、高度を増していくと木の芽も硬く春浅しと変化していき、更に高度を上げ稜線を見上げると、しっかりと雪をまとった赤石岳と荒川岳の雄姿が迫っていた。振り返れば秀峰富士山が思いのほか大きく見えている。

大自然の醍醐味を全身で感じ、改めて自然に接する喜びで一杯になった。熟練・若手と幅のあるメンバー構成の中、赤石岳のアタック日は、BC(富士見平)にてW先輩に若手の雪上技術トレーニングをかってでて貰



小赤石岳への尾根核心部



赤石岳-小赤石岳主稜線

い、私たち3人は先輩のご好意に甘んじ、目標の赤石岳の頂上に立てた。また、BC帰着時の歓待には、目が潤まんばかりであった。

中堅・新人の雪上技術向上を目的として赤石岳登山を計画し、若手の参加があり大変喜ばしいことではあったが、その全員がBC止まりとなってしまった事については、山域選定の妥当性に対して、微妙な想いも残る。しかし、BCから見たあの小倉尾根上部のナイフリッジと白銀の赤石岳、あの雄姿の強烈な印象は生涯まぶたの奥で輝き続け、山への想いも熱く燃え続けて行くのではなからうか。(亀山)

合宿を振り返って

ベテランと若手部員のコミュニケーションも良く、最強のチームワークで合宿が出来た事が非常に良かった。メンバーに感謝したい。結果論になってしまうが、今回のルートは全員登頂させるには少し難しいルートであった。その代りと言ったら語弊があるかもしれないが、若手部員の雪上訓練が出来た事は良かったと思う。合宿の目的の一つに「新人の育成、技術の維持向上」を毎回掲げているが、まだまだ、長い目で育てて行く必要があると感じた。あせらず、安全第一で今後も皆と活動して行きたい。(金子)



富士見平のBCと富士山

参加感想

天気に恵まれ富士山がしっかり見えました。テンパのロケーションも良く、メンバーも若手からOBまで幅広く、山の楽しさを満喫しました。(竹内)

感想

2日間快晴が続き、常に、富士山を拝む事が出来て最高でした。次回はもっと技術を習得して、頂上をアタック出来るようになりたい。(村越)

感想

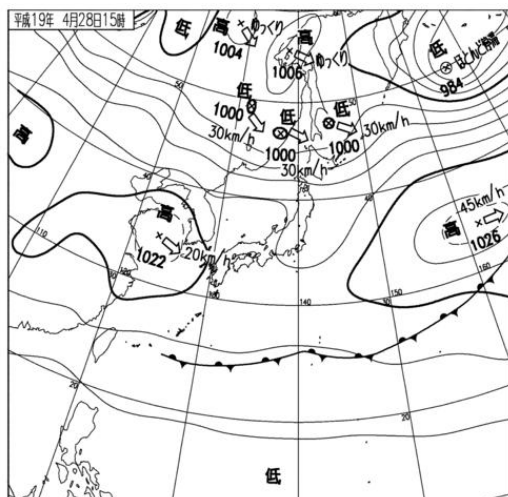
今回は天候に恵まれ、雪上技術もしっかり教わり有意義な合宿となりました。山頂アタックに望んだ先輩方は勇ましく、雪上訓練隊と共にBCにて彼らを見守り、無事帰還の喜びを全員で味わえたことも素晴らしい体験でした。

<食糧計画：おまけ> 移動中の道の駅で採れたて竹の子(水煮)を購入した所、うどんのダシでおいしくいただき、好評でした(竹内さんの案)。次回は村越家の竹の子が登場する予定です！(松中)

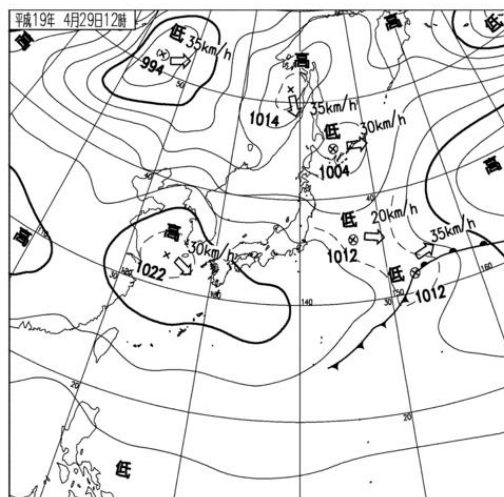
反省

今回の南アルプス赤石岳(あるいは荒川三山を含め)は憧れの山域であると共に、全くはじめて足を踏み入れる山であった。現地、富士見平から見たラクダの背と先に続く小赤石岳へのナイフリッジには脅威を感じた。期待頂いた先輩のアタック指名をお断りしたことは情けなく、また個人装備のハーネスを忘れたことは猛省しなければなりません。(江頭)

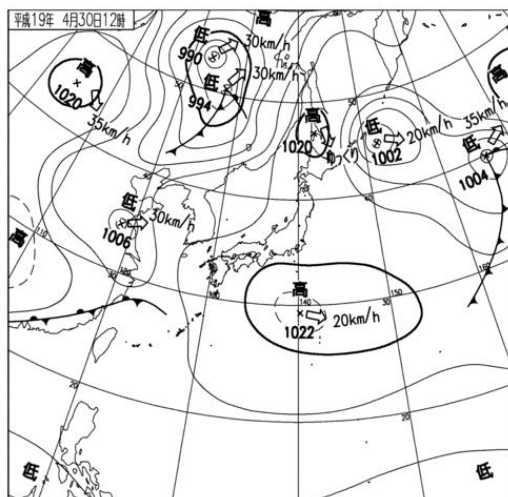
気象報告



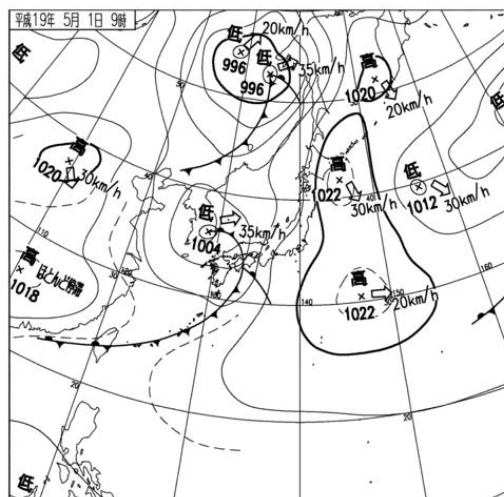
4/28 初日の移動日、高気圧により晴れていたが午後から気圧の谷が通過、一時雨となった。



4/29 入山日は朝から快晴。移動性高気圧に覆われ、雲ひとつない登山日和となった。



4/30 移動性高気圧に覆われ快晴。赤石岳のアタック。富士山が終日見えていた。中国大陸に低気圧が発生、明日の下山日は下り坂の予想。



5/1 下山日。低気圧が接近、曇りのち雨となった。午前8時過ぎから雨が降り出してきたが、その頃には下山を完了することができた。

(竹内)